

三鷹教育・子育て研究所「学童研究会」

第3回 次 第

令和4年1月19日（水）

18時～19時30分

三鷹ネットワーク大学・オンライン併用

- 1 三鷹市子ども政策部長挨拶
- 2 三鷹市の学童保育所の今後のあり方について
- 3 意見交換
- 4 事務連絡

【配布資料】

- 1 放課後の子どもの居場所
- 2 学校を拠点とした放課後の居場所
- 3 学童と地域Cの連携運営図まとめ
- 4 第2回議事録

参考資料 学童研究会第1～2回議事録まとめ

三鷹教育・子育て研究所「学童研究会」

(第3回会議録要旨)

日 時 令和4年1月19日(水)午後6時～7時30分
会 場 三鷹ネットワーク大学・オンライン併用
出席者 井口 眞美(座長)、柴田 彩千子、池本 美香(オンライン)、井梅 由美子、
森本 かおり、松永 透
欠席者 小坂 和弘
事務局 三鷹市子ども政策部 児童青少年課、三鷹ネットワーク大学

〈議事要旨〉

(注) この会議録は抄録であり、すべての発言が記載されているものではありません。

1 三鷹市子ども政策部長挨拶和泉 敦 子ども政策部長
新型コロナウイルス感染症の流行が再拡大している。三鷹市でも感染者が増えている。学級閉鎖、休園の所もある。学童保育所は開所している。

今回の3回目で最終回となる。今まで議論したことを踏まえ、中・長期的な展望、意見を伺いたい。学校3部制、地域こどもクラブとの連携・一体化、メリット・デメリット等併せて、忌憚ない意見をお願いします。

2 三鷹市の学童保育所の今後のあり方について

○事務局：本日、小坂研究員は公務のため欠席される。池本研究員はオンラインでご出席いただく。

○井口座長：新型コロナウイルス感染症が広がっている。子どもたちのために、議題である学童保育所の長期的な展望等を議論したい。

事務局に資料の説明をお願いします。

○事務局：配布資料は5点である。

資料1、放課後等における小学生の居場所の状況をまとめた。左側は学校施設または外部施設である。小学校では、学童保育所、地域こどもクラブ、地域未来塾、コミュニティ・スクール事業などがある。その他に、図書館、星と森と絵本の家、東・西多世代交流センター、むらさき子どもひろば、コミュニティ・センター、総合スポーツセンターなどが挙げられる。

右側は、にしみたか学園を例に、小学生の居場所の現状を曜日一覧にした。表の太枠内は学校内で行われていることである。学童保育所は月～土曜日に、図書室開放は金～日曜日に実施している。地域によって異なるが、例として提示する。

資料2、学校を拠点とした放課後の居場所の拡充について、左側に現状、課題をあげた。登下校時の事故等の保護者の不安感や、ボランティア人財の育成が課題である。子どもの意

見を踏まえることも必要である。下の図、地域こどもクラブは、週3～4回実施している。右に、将来のイメージをあげた。学童保育所と地域こどもクラブの人財交流や一体的運営、待機児童の定義の明確化を行いたい。また、運営者の研究カリキュラムを充実させたい。子どもへのアンケート調査を広く行いたい。高学年の子どもの居場所も確保したい。学習面では地域未来塾との連携を目指したい。研究員にご意見を伺いたい。

資料3、将来的な運営に向けた実施イメージ図を4つのパターンで提示する。地域により地域こどもクラブの状況は異なる。今すぐ一本化は難しい。

Dパターンは、第六小の実施例である。地域こどもクラブ実施委員会と民間の事業者が並列で一体的に連携・協力・運営をしている。

Aパターンは、地域こどもクラブと学童保育所を一体化して、民間事業者に委託する。地域こどもクラブの保護者、PTA等は民間事業者が任用する。

Bパターンは、地域こどもクラブと民間が並列である。地域こどもクラブのマンパワーが厳しい場合に、人材派遣会社に再委託することで体制を補い、安全管理者を配置する。調整会議を開く。

Cパターンは、地域こどもクラブと民間いずれもマンパワーがある地域である。民間事業者に学童保育所の運営をしてもらう。

どのパターンも連携・協力は必須である。

最後に、令和4年度の申込について現在の状況を報告する。今年も100名程増加している。第五小、中原小、第一小、全体的に伸びている。地域こどもクラブとの一体化、連携も必要だと考えている。

3 意見交換

○井口座長：事務局からの情報提供や説明を受け、皆様の立場から、質問も含め、ご自由にお一人ずつ全員に発言をお願いします。

では、井梅研究員からご意見ををお願いします。

○井梅研究員：事務局からのイメージについて、提案通りになるとよいと考えている。連携も具体的に図で示していただいている。資料1、小学生の居場所の状況というところで、子どもたちが主体的に選んでいければよいと考える。どこで、どのような事業を実施しているか、ということを知りて欲しい。高学年になれば、少し離れた場所でも自ら行くことができるようになる為、知る機会が大切だ。

○柴田研究員：資料1、放課後の子どもの居場所について、多く提示されていることが良かった。まずは、保護者や子どもたちへ周知をすることが大切だ。子どもが、学校の延長だという気持ちで過ごすのではなく、自分らしくのびのびと過ごせる場所であることが望まれている。不登校の子どもでも、地域の中で自分らしく、自由に過ごせるとよい。参考資料の2番、川崎市の子ども夢パークについて、補足説明する。この施設は市民運動によりつくられた。その中の「フリースペースえん」は、不登校の子どもの居場所であり、不登校から次

のステップに進むことができる。川崎市では、「子ども会議」というものがあり、有志が参加し、「このような街にしてほしい」等の意見やアンケート結果をまとめ、報告書として市長に提出している。この過程の中で子どもの成長も見ることができる。

三鷹市でも、不登校の子どもが次のステップに進めるような居場所づくりに取り組んで欲しい。

○井口座長：子どもたちが主体的に参加できるように、周知が大切だということ。また、川崎市の事例の紹介、子どもたちの声を拾いながら進めることの大切さをご提案いただいた。

資料1は、にしみたか学園の取り組み例について提示いただいたが、他の地域の状況も、事務局にお答えいただきたい。

○事務局：コミュニティ・センターや図書館はどの地域にもほぼ有るが、多世代交流センター（児童館）が無い地域がある。図書館が遠くて行きづらい場合もある。コミュニティ・センターの中で児童館の役割を果たすなどで、拡充していきたいと考えている。

○森本研究員：三鷹駅周辺からは、多世代交流センターが遠くて行きづらい。駅前コミュニティ・センターは、会議室が中心であり、体育館もない。駅前地区は、資料1と比べても、子どもの居場所が少ない。安全・安心面を考えると、なるべく学校の中に居場所があるとよい。マンパワーを結集する必要がある。

地域子どもクラブは、子どもが主体的に、積極的に活動に参加していることが多いが、地域未来塾は、そうではない。補習的な面が主であり、この2つを並列することに違和感がある。学習にも楽しんで参加してもらうことが大人の課題だが、ハードルが高いと感じている。

○井口座長：地域未来塾について、小学校と中学校の違いを教えて欲しい。

○森本研究員：ニーズは学校毎に、また学年によっても違い、教師の意見を中心に活動している。中学校では、自習室という側面が大きく、部活動が盛んな場合、地域未来塾の利用者は少ない。

○松永研究員：地域未来塾について説明する。目的としては、地域と学校が一体となり、基礎学力の向上と学習習慣の確立を図ることである。放課後に学習課題に取り組み、教師に質問もできる体制を整えた。学力に課題がある児童に対して、学校側から参加を促す場合もあれば、自主的に子どもが参加する場合もある。昨年度は年間259回開催する学校もあった。その内35日間は夏休みに開催した。

中学生は、試験前は部活動が休みのため、地域未来塾に参加することが多い。地域住民、元教員、保護者、ボランティアの大学生等が教えている。中学生にとっては、大学生と身近に接することで、自身の将来像を描ける効果もある。

地域未来塾は、学校3部制の第2部、放課後の活動の選択肢の一つである。

○池本研究員：学童保育所が地域子どもクラブと一体化するということは良いと思ったが、学校とのかかわりはどうなっていくのかが気になっている。海外の事例だと、コミュニケーションを大事にしているが、事務局の説明からは分離している印象を受けた。海外では校長が、学童保育所の責任者となっているところもある。コミュニケーションを取ることが大事

だ。

障がいのある子どもの放課後はどうなっているか。発達障がいや、特別な支援が必要な子どもの放課後の議論が必要だ。インクルーシブ教育について、車いすの子どもも一緒に過ごせたり、インクルーシブな公園等、障がいのある子どもも一緒に過ごせるような検討も必要だと考える。どう過ごしているかなど実態把握の調査が必要。学校の性犯罪も議論されており、放課後、学童保育所の安全性も含め、調査結果を踏まえてどう対応するかの検討も将来的に必要なだ。

○井口座長：学校の障がい児等の実態把握、また安全性についての課題を挙げていただいた。

○松永研究員：学校と放課後運営の連携、情報交換については、エピソードを共有している。ただ、現時点では一人ひとりの子どもをみる所、地域子どもクラブとのコミュニケーションまではいかない。第六小では、月に1回児童青少年課、教育委員会も入りながら会議をしている。

実態把握については、タブレットを一人一台持つようになり、アンケートフォームなど活用しながら、中学生に部活動の調査を行った。今後も様々なアンケート調査が可能だ。

○事務局：障がい児の対応について、実際、4年生までは預かっている。6年生まで対応できるようにする等、検討している。

○井口座長：学童保育の質の向上について、西東京市についての論文の例を挙げる。学童保育所の職員が研修を求めているとのことである。特別支援についての知識が無く苦慮されている。その他にも、保護者の支援、保育技術の悩みなどがある。

資料3について、学校と地域こどもクラブの間で、情報交換をして欲しい。子どもの意見を聞くだけでなく、職員の方へのニーズ調査も必要である。安全という面では、見守りシステムの所があったが、システムで出欠の管理はできるのか。品川区ではICチップで管理している。

○事務局：学童保育所では、カードで管理している。入退室の時にカードリーダーに通し保護者にメールで伝わる仕組みだ。にしみたか学園の例を挙げると、学校や学童保育所の外での活動もある。広い範囲で居場所を考えた場合、ビーコンを利用できないか検討している。

○井梅研究員：特別支援の対応について、先生方が苦慮されている。巡回をしたり、心理士などにも相談できたらよい。

○井口座長：学校3部制について説明願う。

○事務局：学校の施設を利用することを前提に考えている。

○柴田研究員：学校3部制について、子どもたちだけではなく、大人、例えば地域住民や保護者が一緒に学ぶという視点も入れて欲しい。コミュニティ・センターや公民館等も含めて、サークルやイベントを行い、そうすることで世代間交流を推進することができる。キャリア教育という面でも、子どもの相談にもものってもらえることも期待できる。

○池本研究員：子どもだけではなく、地域の人に関わるとよい。海外の事例では、学校にペアレントルームがあり、保護者同士で交流ができる。地域の人が、学校の図書館を利用でき

るとよい。例えば、保育施設の取り組みである園児、保護者、地域の高齢者が交流できるブックカフェのような仕組みはどうか。

○松永研究員：土曜日に、学校の図書館を地域に開放している。外階段から入室できる。ただ、児童書が多く、高齢者のニーズには合わないことが多いと考える。

○井口座長：学校の図書館に外階段から入室できるというのは、3部制のハードルも下がり効果的だ。

○松永研究員：学校3部制の第3部が課題である。不特定多数の人が使えるようにするには、制度設計が難しく、法的な研究も必要だ。まずは普通教室以外の特別教室や会議室等の活用を考えたい。ニーズ調査をしながら、整えなければならない。

○井口座長：地域子どもクラブとの一体的な運営について、使える場所を伺う。

○松永研究員：全教室が利用可能だと考える。普通教室も含めて、使えるようにしたい。今始めているのは第六小である。予算をとり、ロッカーにシャッターを工事する予定だ。教師の意識改革も必要で、学校を自分たちだけ、学校関係者だけのものという意識ではなく、外に向けても開放する感覚を養ってほしい。

○井口座長：子どもや大人が自発的に参加することが理想だ。民営化することによって、閉ざされることは避けたい。

○池本研究員：保育施設では、園庭で焚火をしたり、ピザを焼いたりできる場所があった。児童館では、子どもが撮った写真を展示したりと、施設で様々な事業実施が考えられる。毎日学校だと飽きることもあるので、学外活動例えば、森や公園にグループで行くことはできないか。また移動図書館を利用したり、移動遊び場のバスの利用ができれば、変化があつてよいと考える。

○井口座長：児童にタブレットが配布されているので、テーマを決めて写真を撮り、コンテストを開催したり、「三鷹の好きな場所」のような写真展を企画したりするなど、場づくりが期待できる。

○井梅研究員：学校では、PTAルームがあるが、そこを発展して、保護者が交流できるカフェになったらよいと考える。保護者にとって、学校は居られる場所が無く、敷居が高い場合がある。気軽に立ち寄ることができる場所があれば、PTAの役員にも積極的に参加ができるのではないか。

○森本研究員：資料3について質問である。Aパターンを将来的に目指しているイメージなのか。

○事務局：現状決めていない。地域子どもクラブが、NPO法人化し、将来的に学童保育所の運営も行いたいということがあるかもしれない。今は事業者指定管理者として学童保育所の管理運営を頼んでいるが、将来的には一体化する場合も考えられる。

○森本研究員：学校3部制の2部は、本来教員の業務の範囲ではない。教員の働き方改革が必要である。地域子どもクラブは、教員ではないボランティアが子どもを預かるが、障がいのある子どもの情報共有など、個人情報扱い方をどうすればよいか。

○松永研究員：地域子どもクラブは、保護者やPTA、地域住民といろいろな地域こどもクラブがある。また、同じスタッフがくることもあれば、週何回か別のスタッフがくるということもあり、子どもの情報を共有するのは難しい。情報共有の方法としては、情報を学校に伝え、学校から保護者に伝えることが望ましい。

○井口座長：保護者に許可を得てから、子どもの情報を共有するとよいのではないか。

○池本研究員：現場の評価制度を提案したい。板橋区では行っている。

○井口座長：保護者が客観的な評価を受け止めていくようになることや、地域間の情報共有が必要である。

○事務局：学童研究会の3回分の意見について、事務局でまとめていく予定である。

○井口座長：最後に、研究員に一言願います。

○井梅研究員：子どもたちの居場所を考えていくきっかけとなった。学童だけではなく、高学年も含めて三鷹の子どもたちの居場所が充実することを願う。学校という場所は、地域のよい資源の為、活動できる場所として、活用していくことが望まれる。

○柴田研究員：コミュニティ行政を活かした、学童保育所づくりについて、地域づくりとコミュニティ・スクール、学童保育所のあり方が重なった。地域が居場所であるという三鷹の強みを活かした子どもの居場所づくりを期待する。

○森本研究員：かつて「小さな児童館運動」というものがあつたと知り、自身も10年後はそんなことがしたいと思った。「お互い様」という意識を広め、地域住民という立場で今後も仕掛けづくりに関わっていききたい。

○池本研究員：今回学童保育所をテーマに掲げた研究会が開催され、学童保育所はあまり取り上げられることがない中、子どもの放課後のあり方について議論できよかった。学童保育所や地域子どもクラブ等、総合的に見てよい場所になるとよい。

○井口座長：地域によって個性がある為、よい意味で一本化はせず、個性を活かしたよい形で連携がとれることが望ましいと考える。地域を活かしながら、学校3部制についても、地域子どもクラブと連携するとよい。

文京区の事例で、青少年が小学生のリーダーとなる事例があつた。三鷹でも中学生の参加を期待したい。子どもたちが自主的に、参加したいところに行ける取り組み、場所を選べるような、地域づくりを願う。

4 事務連絡

○事務局：全3回にわたり、学童保育研究会にて意見を賜り感謝する。今後、事務局が意見集のような形でまとめる予定である。確認を願う。